

## 子どもの家事参加へ工夫

～ まずは幼児期のお手伝いから ～

3歳以上児からは、朝の会や帰りの会の進行、園全体のごみの後片付けや係活動など分担して進めています。どの活動も喜んで行っています。それらの活動を通して協力すること、最後までやり通すことなどを学んでいます。今回は、子ども達に“お手伝い”をさせていくことの大切さを、いつもの 岩立 京子 先生から学びたいと思います。

### 自発的な参加へ導くために

子どもが他者のお手伝いをする体験は、自信や自尊心、思いやりの発達につながっていくことはよく知られています。しかし、年齢が上がるほど、子どもの家事参加が少なることを示した調査結果を見ると、発達に伴って自動的に子どもが自ら手伝ったり、家事に参加したりするようになるとは限らないことがわかります。

幼い頃のお手伝いの経験から、自ら行う家事参加へと導くために、親にはどのような工夫が求められるのでしょうか。お手伝いは、人から要請されてすることも、自発的に行うこともあります。

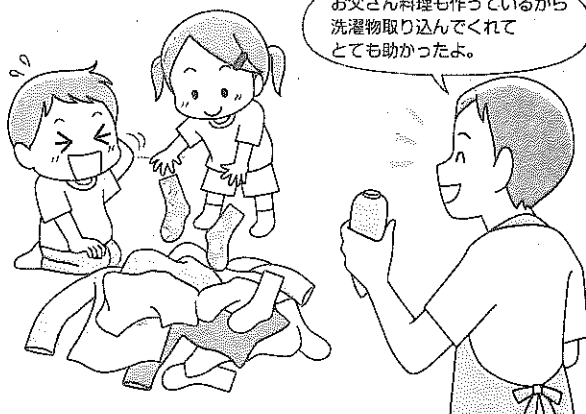
幼児期初期（1歳半から4歳前半くらいまで）は、家庭では生活の世話をしてもらうのが当たり前で、親が何に困っていて、どうすれば助けられるのかとか、自分が親を助けられること自体、まだわかっていません。したがって、幼児期初期くらいは、「お願い、パパ（ママ）は今できないから、これやってくれたらうれしいな」などと、何を、なぜしてほしいのかを言葉で伝えることが大切です。そして、「わあ、これやってくれたんだね。ありがとう。助かるよ」などと、手伝ってもらった結果やそのうれしい気持ちを言葉で伝えることが、経験にプラスの意味づけをして、学びを促すことにつながります。

### ルールを作り、完璧さを求めない

幼児期後期（4歳後半から6歳くらいまで）から児童期初期（6歳から8歳まで）になると、お片付けなど自分がすべきことがわかっていても、しないことも出てきます。なぜなら、お手伝いをしたくないときに、する必要があることを理解し、自分の気持ちや行動をコントロールする力が未熟だからです。その場面で、親が「子どもは気まぐれだし、自分がやったほうが早いから」と思って、やってしまうことが続くと子どももそれが当たり前になり、親がしてくれないと腹を立てたりするようになります。まずはおもちゃなど、自分で使ったものは自分で片づけるなどのルールを、親子で話し合って決めましょう。その際、結果の完璧さを求めすぎず、この程度できれば良いと思う基準（例えば、おもちゃは全部一か所にしまう）から始め、徐々に分類して元の位置に戻すなど、話し合っていければ良いのです。

保育園や小学校の生活では、片付けや当番をしっかりする子どもでも、家では親への甘えもあり、しないこともあります。しかし、これまで説明したように、「お手伝い」という形で家事に参加してもらうことが、児童期以降の子どもの家事参加の第一歩になります。

子どもは学校の勉強だけをするのではなく、家事参加を通して、家族への協力、思いやり、信頼、責任などを学びながら、自立を遂げていってほしいものです。



甥っ子が3人（一番上はすでに50歳）います。その母親（私の姉）がいつも「子育て」で自慢することが一つだけあります。それは、この3人がそれぞれ高校を卒業するまで、お手伝い（家事参加）を続けたからです。幼児期は父親に新聞を渡すことから始め、食卓にお茶碗やお箸を並べること、お風呂掃除やお湯入れなどをそれぞれ分担して毎日欠かさず続けたようです。姉は今でもそのことだけは「子育て」に役立ったと自慢しています。

子ども達一人一人に、自分に自信や自尊心をもち、思いやりや責任感のある子に育ててほしいと願い、ぜひ継続できるお手伝いをさせてあげたいものです。